【原著論文】

幼児の情動調整と母親の内省機能との関連

山岡　愛実[1]・宮本　邦雄[2]
（１：岐阜市子ども若者総合支援センター，２：東海学院大学）

要　約

本研究では，幼児の情動調整は生後の母親との関係の中で形成されていくと考え，母親の育児に関する内省機能および情動調整行動と幼児の情動調整との関連を検討することを目的とした。研究１では，幼児の情動調整と母親の内省機能の特徴を検討することを目的に乳幼児の行動チェックリストECBQ短縮版と母親の省察尺度を使用し，2歳から3歳の子どもをもつ母親150名を対象に質問紙調査を行った。その結果，母親の育児に関する内省機能は子どもの注意の切り替えやすさと興奮からの落ち着きやすさに影響を与え，子育て内省が悲しみやすさを促進し，興奮からの落ち着きやすさを抑制する影響を示した。研究２では，研究１の結果と実際の母子の行動特徴との関係を検討することを目的に，葛藤状況であるおもちゃの片づけ場面を設定して2歳から3歳の子どもと母親10組を対象に行動観察を行った。その結果，子どもは「継続型」「沈静型」「非表出型」「後発型」という４つの情動調整タイプに分類され，各情動調整タイプの行動特徴とECBQ尺度及び母親の内省機能と情動調整との関連が確認された。

キーワード：子どもの情動調整，母親の内省機能，母子関係

(2016. 9. 23 受稿　査読審査を経て　2016. 10. 21 受理)

問題と目的

Bowlby(1969/1982)は，発達初期の母子関係を通して形成される愛着の安定性は，その後の適応的な発達にとって重要な役割を果たすことを指摘した。その後，母親の愛着スタイルと子どもの愛着との連関が報告され，愛着の世代間伝達が認められることになった(van IJzendorn,1995; 数井・遠藤・田中・坂上・菅沼，2000)。

母子間の愛着の連関を媒介する要因として重要視されてきたのは，母親の敏感性（sensitivity）であった。Ainsworth, Blehar, Waters & Wall（1978）は，ストレンジシチュエーション場面における観察から，母親の敏感性が子どものネガティブな情動表出に対する適切な養育行動を導くとした。しかし，その後の諸研究によると敏感性の媒介効果は顕著なものではないことが示唆されてきた（van IJzendorn,1995; Pederson, Gleason, Moran & Bento,1998)。

子どもが不安や不快状態において愛着対象に対して示す愛着行動は心理的安定を回復するための情動調整機能をもつ。Bowlby(1969/1982)は，認知的発達に伴い愛着に関する心的表象としての内的作業モデル（Internal Working Models）が形成されると考え，自律的な情動調整機能の発達をもたらすことを示唆した。

生後 2〜3 歳頃の時期は，愛着対象との相互作用による情動調整から自律的調整への移行期にあると考えられるので，この時期の情動調整をめぐる母子相互作用を明らかにすることは大きな意義がある。

森田（2004）は，乳幼児期の情動調整に関する先行研究を展望し，情動調整は快情動の調整も含む概念であるが，不快情動の調整が社会適応にとって重要であるとの指摘（Kopp，1989）を踏まえて，不快情動の調整に焦点を当てている。さらに，金丸・無藤（2004，2006）でも，適応的に生活するためには，自己の情動の混乱に巻き込まれない程度に，不快情動の強さや長さを柔軟に調整することが重要であることから（Kopp，1989），情動調整を「不快情動反応が，一定の時間内において状況適応的に調整され，変化するプロセス」として捉えている。

本研究では，金丸・無藤（2004; 2006）や森田（2004）が取り上げているように，不快情動の調整に焦点を当て，情動調整を「不快情動反応が，一定の時間内において状況適応的に調整され，変化するプロセス」と定義し，2

歳から3歳の子どもとその母親を対象として調査を行う。

久保（2010）は，乳幼児における情動調整の研究を概観する中で，Eisenberg，Hofer & Vaughan（2007）が提示した，情動調整の個人差の3タイプのモデルに着目している。すなわち，衝動性が高く行動を抑制することがほとんど無い「調整不全」タイプ，衝動性が低く新奇な状況を怖がるなどの行動抑制が高い「調整過剰」タイプ，情動を抑制する力を持ち，注意を適切に転換したり集中したりする力であるエフォートフルコントロール（effortful control）が上手な「適度な調整」タイプである。このモデルから，情動調整が不足することだけでなく，過剰であることもまた問題であることを指摘している。金丸・無藤（2004）は，おもちゃを片づける葛藤場面において母子相互作用を観察し，不快情動変化のタイプを，不快情動が持続する「継続型」，不快情動が沈静化する「沈静型」，不快情動が表出されない「非表出型」の3つに分類した。

気質は，個人の行動などにみられる一貫性のある特徴を指すが，中川・木村・鋤柄・水野（2011）は，新生児期に認められる気質的特徴が乳幼児期を通して一貫性を有することを示し，子どもの発達における気質的特徴の重要性を指摘し，18ヶ月から36ヶ月の幼児を対象とした The Early Childhood Behavior Questionnaire（ECBQ; Putnam, Gartstein & Rothbart, 2006）の短縮版を作成した。18尺度各4～7項目からなり，十分な内的整合性を持ち，標準版とも有意な相関がみられた。また，この18尺度について探索的因子分析（主因子法，直接オブリミン回転）を行なった結果，標準版と同様の3因子構造が再現された。第1因子は高潮性／外向性（Surgency／Extraversion），第2因子は負の情動性（Negative Affectivity），第3因子はエフォートフルコントロール（Effortful Control）であった。高潮性／外向性因子は Discomfort，Fear など7尺度，負の情動性因子は Activity Level，High Intensity Pleasure など4尺度，エフォートフルコントロール因子は Attentional Sifting，Perceptual Sensitivity など3尺度で構成された。本研究では，この ECBQ 短縮版18尺度より，幼児の情動調整に関連すると考えられる特徴として以下の5尺度，すなわち Attentional Sifting（AS：注意切り替えやすさ），Frustration（F：不満の感じやすさ），Inhibitory Control（IC：従順さ），Sadness（SA：悲しみやすさ），Soothability（SO：興奮からの落ち着きやすさ）を使用することとした。このうち，「注意切り替えやすさ AS」，「従順さ IC」と「興奮からの落ち着きやすさ SO」は良好な情動調整，「悲しみやすさ SA」と「不満の感じやすさ F」は情動調整の不全と考えられる。

幼児の情動調整の発達において，愛着対象である母親の敏感性が重要な役割を果たすと考えられてきた（Ainsworth et al.,1978）。敏感性の概念は「子どものシグナルを感知し，解釈し，適切に，タイミングよく反応する」といった多義的なものであり，多く含まれている要素のどの特徴が中核的に重要なのかが明確でないことが指摘され，この概念の再考が議論されている。敏感性の派生概念の中で，養育者の能力として重要視されているものの中に，メンタライジング（mentalizing）という概念がある（Fonagy，2001）。メンタライジングは「自分自身や他者の精神状態に注意を向けること」と定義され，あらゆる精神状態に関連しており，欲望，ニーズ，感情，思考，信念などがその一部として挙げられている。自分だけではなく他者のそうした内的状態に注意を向けること，知覚すること，認識すること，推測すること，思い出すことなどを含む，精神状態に関連する広範囲な認知的操作である。

岡本（2010）は，メンタライジングの具体的な現れとして，内省機能（reflective function）を挙げ，「自己の心的状態や他者の心的状態から，自分や他者の行動の意味を認知し，理解する能力（Fonagy，2001）」であるとし，母親の役割として，母親が子どもの心的経験を内省し，子どもが理解できる行動の言語に翻訳して，これを再提示できる能力が求められるとしている。

朴・杉村（2006）は，子育てに関する省察（内省）の3層モデルを提案し，子育ての認知過程における用語や概念を整理した。そのモデルでは，第一に省察の認知のレベルと省察が及ぶ時間の範囲とし，第二に省察の対象の分離であり，省察に用いる情報を「親自身に関する情報」，「自分の子どもに関する情報」，「他の親や子どもに関する情報」の3つに分けている。第三は，他者を通して行われる省察の明確な位置づけである。

さらに朴・杉村（2009）は，この省察の3層モデルに基づき幼児をもつ親の省察の個人差を測定する尺度を作成し，構成概念妥当性の検証を通して，親の省察の構造を検討するとともに，その尺度の信頼性と妥当性を確認している。子育てに関する省察尺度は，親自身に関する省察12項目，子どもに関する省察12項目，他者を通した省察8項目，計32項目で構成され，回答は5段階で評定された。その結果，親自身に関する省察は，自己の

子育てをふり返り内省する「子育て内省」因子と子どもと向き合う前やその場での自己の子育てを意識する内容の「対場面的省察」因子の2因子，子どもに関する省察では，長期的な視点から子どもに関してふり返り見通しを持つ「子ども見通し」因子と子どもと向き合っているその場での子どもへの注意や気づきを内容とする「子どもモニタリング」因子，子どもの個別的な反応について考えをめぐらす「子ども考慮」因子の3因子，他者を通した省察は，他の親や子どもの言動を注意深く見たり話したりする「他者モニタリング」因子と他者の育児を通して自己の育児を見直したり方針を改める内容の「他者を通した内省」因子の2因子構造が妥当であった。

本研究では子育てに関する母親の内省機能を測定するために，上記の省察尺度を用いることとする。そこで本研究では，2歳から3歳の子どもの情動調整と母親の内省機能との関連を，質問紙調査と行動観察によって検討することを目的とした。

研究1

幼児の情動調整の発達に母親の内省機能がどのように関連しているかについて，母親の内省機能と子どもの情動調整の特徴を質問紙調査により検討することを目的とした。

Fonagy(2001)の愛着の世代間伝達における内省機能の媒介説からは，母親の子育てに関する内省機能が高いほど子どもの情動調整能力の発達は促進されると考えられる。すなわち，母親の省察尺度の「子育て内省」，「対場面的省察」，「子ども見通し」，「子どもモニタリング」，「子ども考慮」，「他者モニタリング」，「他者を通した内省」の各尺度は，子どものECBQ尺度の「注意切り替えやすさAS」，「従順さIC」，「興奮からの落ち着きやすさSO」との間には正の影響が，「不満の感じやすさF」や「悲しみやすさSA」との間には負の影響がみられると予想される。

方法

調査対象者

岐阜県・愛知県に在住の生後2歳から3歳の子どもをもつ母親150名であった。回答に不備のあったものは分析対象から除き130名を分析対象とした。母親の年齢は24歳から45歳（平均年齢33.18歳，SD=6.08）であった。子どもの年齢は月齢21ヶ月から44ヶ月（平均月齢32.44ヶ月，SD=7.14）であった。

調査方法

子育て支援のイベントや保育所・児童館などに協力してもらい，筆者が調査内容と調査の趣旨および個人情報の保護について説明した後，調査協力者にその場で質問紙を配布し，回答後，回収した。

質問紙構成

1）情動調整の気質的特徴：中川ら（2011）が作成した乳幼児の行動のチェックリストECBQ短縮版を使用した。そのうち，「注意切り替えやすさAS」尺度6項目，「不満の感じやすさF」尺度6項目，「従順さIC」尺度6項目，「悲しみやすさSA」尺度6項目，「興奮からの落ち着きやすさSO」尺度5項目の5尺度29項目を使用した。回答は「全くみられなかった」から「いつもみられた」までの7段階評定であった。

2）省察尺度：母親の内省機能を測定するために朴・杉村（2009）により作成された，親の子育てに関する省察尺度を使用した。「子育て内省」6項目，「対場面的省察」4項目，「子ども見通し」5項目，「子どもモニタリング」3項目，「子ども省察」3項目，「他者モニタリング」5項目，「他者をとおした省察」5項目で構成されている。回答は「まれに」から「いつも」までの5段階評価であった。

なお，本研究は東海学院大学研究倫理基準に則り行なわれた。

結果

1．省察尺度とECBQ尺度の相関

省察尺度とECBQ尺度の下位尺度間のPearsonの相関係数を求めた。省察尺度の「子育て内省」とECBQ尺度の「悲しみやすさSA」との間に正の有意な相関（r=.212,p<.05），「子育て内省」と「興奮からの落ち着きやすさSO」との間に負の有意な相関がみられた（r=-.191,p<.05）。また，「他者モニタリング」と「興奮からの落ち着きやすさSO」との間に負の有意な相関がみられた（r=-.181,p<.05）。

2．省察尺度とECBQ尺度の重回帰分析

省察尺度を説明変数，ECBQ尺度を目的変数とした重回帰分析を行なったところ（表1），重決定係数（R^2）は低いものの有意な標準偏回帰係数（β）が認められた。

母親の「子育て内省」は子どもの「悲しみやすさSA」に促進的，「興奮からの落ち着きやすさSO」に抑制的な影響を示した。「対場面的省察」は「不満の感じやすさF」

に抑制的，「従順さ IC」に促進的影響を及ぼすことが認められた。一方，「子ども見通し」は「従順さ IC」に抑制的な影響を及ぼすことが示された。さらに，「子どもモニタリング」が子どもの「注意切り替えやすさ AS」に促進的な影響を及ぼすことが認められた。

考察

研究１の目的は，母親の育児に関する内省機能と子どもの情動調整との関連を検討することであった。まず相関分析の結果から，母親の「他者モニタリング」と「興奮からの落ち着きやすさ」との間に有意な負の相関がみられた。

重回帰分析の結果からは他の要因の関連が示唆されるが，母親の内省機能の子どもの情動調整に及ぼす影響を考察する。子どもの「注意切り替えやすさ AS」には，「子どもモニタリング」が促進的な影響を示していた。子どもが不快情動を表出した際，母親は子どもの表情や言動に注目することで，なぜ不快情動を示しているのかを敏感に察知でき，不快情動を喚起させている原因から上手く切り替えさせることができると考えられる。子どもの様子を良く見ているからこそ，タイミングよく適切な言い方で注意の切り替えを促すことができるのであろう。

こどもの「不満の感じやすさ F」についてみると，「対場面的省察」が抑制的な影響を示していた。「対場面的省察」は，子どもと向き合っているその場で自分の伝え方や言動に気をつけたり，母親が自分の言動の影響を考えたりするなど，子どもに対して注意を向けながら落ち着いて接する母親の姿を示している。こうした母親の対応によって，子どもが欲求不満をもつ機会が少ないのではないだろうか。

「従順さ IC」をみてみると，「対場面的省察」が促進的な影響を示しており，子どもは不満を生じにくく，母親の言葉に素直に応じる傾向を促進した。一方，「子ども見通し」は抑制的な影響を示していた。「子ども見通し」はこれからの子どもの成長について考えたり，子どもがどう変わってきたのかを振り返ったりするといった長期的な視点の省察であるため，現在の子どもの状態を把握することには結びつかないのではないか。

「悲しみやすさ SA」については，「子育て内省」が促進的な影響を示していた。「子育て内省」は自分の子育てを振り返り改善するべきところを考える，親としての自分の長所・短所を考えるなど，親としての自分に対してネガティブな側面を含んだものであり，自分自身の子育てを振り返る中で，子育てや子どもに対するネガティブな意識を持つことが高圧的な養育態度として現れ，子どもは悲しみやすくなると考えられる。

「興奮からの落ち着きやすさ SO」は，「子育て内省」が抑制的な影響を示した。「悲しみやすさ SA」と同様「子育て内省」が高いと，子どもが不快情動を表出して興奮している際，高圧的な対応になる可能性が高く，母親のネガティブな意識や態度によって自らの情動を落ち着けることが難しいのではないだろうか。

これらの結果は，母親の内省機能が子どもの「注意切り替えやすさ AS」，「従順さ IC」に促進的影響を与えることを示唆し，ほぼ仮説を支持するものであった。しかし，母親の「子育て内省」は子どもの「悲しみやすさ SA」を促進し，「興奮からの落ち着きやすさ SO」を抑制する影響を示したことは仮説を支持するものではなかった。

「子育て内省」は自己の子育てをふり返り内省する傾向を表しており，「子ども見通し」は長期的視点から子どもとの関わりをふり返り見通しをもつ傾向を示している。朴・杉村（2009）は，省察尺度と自己意識・自己内省と

表1　ECBQ 尺度を目的変数とした重回帰分析結果（β）

	AS	F	IC	SA	SO
子育て内省	−.126	.130	−.209	.273**	−.267**
対場面的省察	.172	−.258**	.356*	.006	.110
子ども見通し	−.012	.030	−.272*	−.055	−.087
子どもモニタリング	.210**	.201	−.029	−.044	.116
子ども考察	−.155	.073	.136	−.033	.160
他者モニタリング	−.080	.126	−.059	−.037	−.185
他者をとおした省察	.096	−.127	−.006	.056	.000
R^2	.066	.069	.112	.052	.082

* p<.05，** p<.01

の関連も検討しているが，自己について同じことを繰り返し考え，悩みや心配などを増幅する傾向につながる「自己反芻」と関連があることを指摘している。自己の子どもの情動調整にも抑制的な影響をもたらしたとも考えられる。

研究 2

研究 2 では，おもちゃの片づけ場面を設定して母子の行動観察を行い，幼児の情動調整タイプを分類するとともに，母親の情動調整行動との関連を検討することを目的とした。さらに，研究 1 による母親の内省機能と幼児の情動に関する気質的特徴との関連も検討する。そこで，金丸・無藤（2004; 2006）による幼児の情動調整タイプの研究や Fonagy（2001）の愛着の世代間伝達に関わる内省機能媒介説に基づき，以下の仮説を検討することを目的とした。

仮説 1：子どもの情動調整の個人差（継続型，沈静型，非表出型）は ECBQ 尺度を反映するであろう。すなわち，「継続型」は「不満の感じやすさ F」，「悲しみやすさ SA」，「沈静型」は「注意切り替えやすさ AS」，「興奮からの落ち着きやすさ SO」，「非表出型」は「従順さ IC」の得点が高いだろう。

仮説 2：情動調整の個人差と母親の内省機能との関連では，沈静型の子どもの母親は「対場面的省察」，「子どもモニタリング」の得点が高いだろう。継続型の子どもの母親は「子どもモニタリング」や「対場面的省察」の得点が低いだろう。非表出型の子どもの母親は，「他者モニタリング」や「他者をとおした内省」の得点が高いだろう。

仮説 3：母親の内省機能と母親の調整行動について，「対場面的省察」，「子育て内省」，「子どもモニタリング」の得点が高い母親は，葛藤場面において子どもの心的状態に焦点を当てた「受容」行動や「注意切り替え」行動，「洗練された説得」行動などがみられるだろう。一方，「他者モニタリング」や「他者を通した内省」の得点が高い母親は葛藤場面において子どもの心的状態に焦点を当てた言動が少ないだろう。

方法

調査協力者

岐阜県に在住の生後 2 歳から 3 歳の子どもをもつ母親 10 組を観察対象とした。母親の年齢は 24 歳～40 歳（平均年齢 31.6 歳，*SD*=5.26）であった。子どもの年齢は 24 ヶ月～40 ヶ月齢（平均月齢 32.1 ヶ月齢，*SD*=5.63）であった。

手続き

1）観察場面：金丸・無藤（2004），久崎（2011）を参考に，子どもの不快情動が生じる母子葛藤場面という観点から，以下の観察場面を設定して，全ての場面をビデオ録画した。①自由遊び場面 A（10 分間），②片づけ場面（3 分間），③自由遊び場面 B（10 分間）。

2）実験用具：おもちゃ 4 種類を用いた。

3）調査場所：保育園あるいは東海学院大学大学院棟の一室を使用した。

分析方法

母子の情動・行動評定：久崎（2011）にならい，おもちゃ片づけ場面 3 分間を 10 秒毎に区切り，それを 1 単位とするタイムサンプリング法で行った。

1）子どもの情動状態の評定： Hedonic Tone Scale（Easterbrook & Emde, 1983）によって評定を行った。不快情動の評定の基準は，1 単位ごとに「0. なし」「1. 眉をひそめる・抵抗する」「2. むずかり」「3. 明らかな不快」のいずれかで評定された。

2）母親情動調整行動の評定：久崎（2011）が作成した 9 カテゴリーのチェックリストを使用した。「単純な説明」，「洗練された説明」，「注意切り替え（母親始発）」，「注意切り替え（子ども始発）」，「身体的慰撫（母親始発）」，「身体的慰撫（(子ども始発）」，「受容」，「消極的なかかわり」，「微笑み」であった。

3）子ども情動調整行動の評定：久崎（2011）が作成した 9 カテゴリーのチェックリストを使用した。「対象への焦点化（受動的）」，「対象への焦点化（能動的）」，「対象への焦点化（言語随伴的）」，「気晴らし（受動的）」，「気晴らし（能動的）」，「母親への慰撫要求」，「自己慰撫」，「母親への攻撃行動」，「その他」であった。

結果

観察対象となった母子の研究 1 における省察尺度と ECBQ 尺度の結果に基づき，各尺度の標準得点を算出し，表 2 に示した。*SD*= ±1 を基準とすると，全体として省察尺度は調査協力者番号＃5, 36, 37 が高い得点を示し，＃7 が低いことがみとめられた。ECBQ 尺度については，＃1，8 が高く，＃3 が低いことがみとめられた。

子どもの情動調整タイプの分類は，おもちゃ片づけ場面での子どもの不快情動の変化に基づき行なった。片づけ場面開始後 1 分（6 単位）以内に不快情動が 1 以上に

なるか，および7単位以降に明らかな不快情動値がない状態が2単位以上継続するかという基準によって，不快情動が続く「継続型」，不快情動が沈静化する「沈静型」，不快情動が表出されない「非表出型」の3タイプに分類した。また，片づけ場面開始後1分30秒（9単位）以内に，不快情動値1以上が2単位以上継続せず，10単位以降に不快情動値が1以上になるというパターンを「後発型」と分類した。その結果を表3に示した。継続型は1例（＃1），沈静型は2例（＃5，8），非表出型は5例（＃2，3，4，7，36），後発型は2例（＃35，37）であった。各タイプの特徴と母親の情動調整行動との関連を以下に述べる。

表2　調査協力者の属性と各下位尺度の標準得点

	省察尺度							ECBQ 尺度					
＃	子育て内省	対場面的省察	子ども見通し	子どもモニタリング	子ども考察	他者モニタリング	他者をとおした内省	AS	F	IC	SA	SO	情動調整タイプ
1	-0.87	0.65	0	0.41	-0.64	-0.74	-1.02	1.42	2.53	1.23	0.69	1.32	継続型
2	-0.14	-0.36	-0.82	-0.96	-0.23	-0.06	-0.41	-0.57	0.21	0.11	0.49	-0.13	非表出型
3	-0.63	0.32	0.55	0.86	-1.05	0.84	0.8	0.68	-0.12	0.86	-1.81	-1.57	非表出型
4	0.84	-1.04	0.83	-0.05	0.59	-0.06	0.49	-0.07	0.87	-0.44	-0.08	0.60	非表出型
5	2.55	0.65	1.1	1.77	1	-0.96	-0.41	-0.57	0.71	0.67	-0.47	-0.85	沈静型
7	-0.38	0.32	-1.1	-0.96	0.18	-1.87	-1.32	-0.32	0.38	-0.26	-1.04	-0.13	非表出型
8	0.59	-0.36	-0.55	-0.05	0.59	1.52	0.49	1.67	1.87	-0.44	1.65	-0.49	沈静型
35	-0.14	-0.7	0	-0.5	-1.05	-1.87	0.49	0.43	0.71	-1.37	1.07	0.42	後発型
36	1.57	0.65	0.83	0.41	1.41	1.07	1.1	-0.32	-0.28	0.30	-0.27	-0.13	非表出型
37	1.33	1.67	1.1	1.77	1.83	1.29	0.8	-0.82	1.20	-0.81	0.88	-0.49	後発型

注）＃は協力者番号

継続型

継続型と分類した＃1の片づけ場面における子どもの行動と母親の行動を表3に示した。「受動的焦点化」の値が高く，おもちゃへの強い注意集中が認められた。また，母親を蹴る，手でたたくなどの行動も多かった。母親は，「母親始発の切り替え」が少なく，「母親始発の慰撫」と「受容」が特に多い。その際，泣く幼児に対して「どのおもちゃが面白かったの？」と問いかけながらの慰撫行動が頻繁にみられた。

子どものECBQ尺度は，「不満の感じやすさF」，「注意切り替えやすさAS」，「従順さIC」，「興奮からの落ち着きやすさSO」も比較的高いことがみとめられた。母親の省察尺度得点は，「他者を通しての内省」が低いことがみられた。

沈静型

沈静型と分類された＃5，＃8の子どもと母親それぞれの行動カテゴリーによると（表3），「能動的焦点化」が他タイプより多く，片づける際におもちゃやおもちゃを入れた箱に触れて声を出したり引っ張ったりするなど，直接働きかけることが多かった。また，「受動的気晴らし」と「能動的気晴らし」がみとめられた。さらに，「まだ遊ぶ」と言葉によって自分の不快情動を母親に伝えていた。母親の行動は，「楽しかったね」と子どもの気持ちを受容し，「単純な説得」だけでなく，「電車のおうちはどこかな」といった，子どもが受け入れやすいような声掛け「洗練された説得」をし，子どもの注意を不快情動から他の事柄へと切り替える「母親始発の切り替え」がみられた。

母親＃5の省察尺度は，「子育て内省」と「子どもモニタリング」が高い得点であり，「子ども見通し」と「子ども考慮」も比較的高かった。また，＃8の母親は「他者モニタリング」が高得点を示した。ECBQ尺度については，＃5はどの下位尺度も平均±1*SD*の範囲内であり，＃8は「注意切り替えやすさAS」，「不満の感じやすさF」，「悲しみやすさSA」が高い得点を示し，情動調整の低さがみとめられた。

非表出型

非表出型に分類された＃2，＃3，＃4，＃7，＃36の

子どもと母親の行動それぞれの行動カテゴリーを表3に示した。5事例に共通した子どもの行動として，「受動的気晴らし」や「能動的気晴らし」が全体的に多い。母親の行動からは，「微笑み」，「母親始発の切り替え」，「受容」が多いことが特徴的であった。さらに，「子ども始発の切り替え」もみられ，片づけ終わった後の残り時間で，おもちゃが何もない状態の中で「どんなことをして遊ぼうか」と話しながらのやり取りが多く，そのやり取りの中で子どもの気持ちを汲み取った言動が多くみられた。

5事例の省察尺度では各事例の特徴にばらつきがみられ，＃36が「子育て内省」，「子ども考慮」，「他者を通した内省」，「他者モニタリング」が1*SD*以上を示した。一方，＃7は「他者モニタリング」，「他者を通した内省」，「子ども見通し」が低いこと，＃2は「子どもモニタリング」，＃3は「子ども考慮」，＃4は「対場面的省察」の「悲しみやすさ SA」と「興奮からの落ち着きやすさが－1*SD*以下であった。さらに，ECBQ尺度では，＃3の「悲しみやすさ SA」と「興奮からの落ち着きやすさ SO」が低いこと，＃7の「悲しみやすさ SA」が低いこと以外はいずれも平均値程度であった。

後発型

後発型と分類した＃35，＃37の子どもと母親それぞれの行動カテゴリーから（表3），2事例の子どもに共通する行動特徴は「その他」の行動が多いことであった。片づけを促されて抵抗なく片づけを行い，部屋から出ようとドアに手をかけたり，脱いでいた靴を履いて帰ろうとしたりする行動が多かった。その際，母親から「もうちょっと遊んでいくよ」と言われて，まだ帰ることができないとわかると，ぐずったり片づけたおもちゃを出すよ

表3　各母子ペアの情動調整行動カテゴリーの頻度

	継続型		非表出型				沈静型		後発型	
情動調整行動ｶﾃｺﾞﾘｰ	＃1	＃2	＃3	＃4	＃7	＃36	＃5	＃8	＃35	＃37
子ども										
受動的焦点化	16	0	0	0	0	0	0	0	6	0
能動的焦点化	1	0	0	0	0	0	9	1	1	0
言語随伴的焦点化	2	1	0	0	0	0	4	5	5	0
受動的気晴らし	0	3	11	11	0	0	0	7	0	0
能動的気晴らし	0	4	6	7	6	11	7	5	2	2
母親への慰撫要求	0	0	0	4	10	3	1	2	5	2
自己慰撫	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0
母親への攻撃行動	5	0	0	0	0	0	0	0	0	6
その他	0	11	0	0	4	7	1	0	8	13
母親										
単純な説得	6	9	3	3	3	1	2	8	4	3
洗練された説得	0	0	0	1	0	0	5	3	7	0
母親始発の切り替え	3	3	11	8	8	2	8	2	4	8
子ども始発の切り替え	0	4	0	1	0	4	0	1	0	0
子ども始発の慰撫	0	0	0	1	3	1	0	0	2	1
母親始発の慰撫	10	1	0	4	3	4	0	4	4	8
受容	10	5	4	6	1	11	4	1	3	4
消極的な関わり	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
微笑み	8	2	7	11	13	14	5	4	12	4

うに要求したりするといった不快情動を表出していた。不快情動を示した子どもに対する母親の対応は，それぞれ異なるものであり，#35 の母親は「洗練された説得」，また#37 の母親は「母親始発の切り替え」と「微笑み」，「慰撫行動」を積極的に行なっていた。

省察尺度では（表 3），#37 はほとんどの下位尺度において高い得点を示し，子育てに関する高い内省機能を示唆した。一方，#35 は低い「他者モニタリング」がみとめられた。ECBQ 尺度では，#37 で「不満の感じやすさ F」と「悲しみやすさ SA」が高いこと，#35 では「注意の切り替えやすさ AS」が低い得点を示した。

考察

研究２の目的は，おもちゃの片づけという葛藤場面において，子どもの情動調整のタイプと母親の情動調整行動の関連を検討し，さらに研究１の母親の省察尺度得点と子どもの ECBQ 尺度得点がどの程度母子の行動に反映されるのか検討することであった。

子どもは「継続型」「沈静型」「非表出型」「後発型」という 4 つの情動調整タイプに分類された。金丸・無藤（2004）は後発型のカテゴリーを設けていないが，本研究では 2 例が該当した。これは，本研究の設定事態がこれらの子どもがもともと興味をもてない場面であり，早く退出したいという期待が妨害されたことによって生じた不快情動を反映していると推察される。

子どもの情動調整タイプごとの ECBQ 尺度をみると，「継続型」は「不満の感じやすさ F」の得点が高く，「後発型」は「不満の感じやすさ F」と「悲しみやすさ SA」が高く，「注意切り替えやすさ AS」と「従順さ IC」，「興奮からの落ち着きやすさ SO」が低かった。これらの結果は ECBQ 尺度が情動調整タイプに反映されていることを示している。「沈静型」には一貫性がみられず，「非表出型」はほぼ平均的であったことから，仮説 1 を一部支持する結果となった。

タイプ別に母親と子どもの行動，母親の内省機能と子どもの情動調整の特徴を比較した。「継続型」については，母親の省察尺度は「他者を通した内省」が低く，子どもの ECBQ 尺度は「不満の感じやすさ F」が極めて高く，一方「注意の切り替えやすさ AS」，「興奮からの落ち着きやすさ SO」，「従順さ IC」も高いという情動調整の高さもみとめられた。また「母親始発の慰撫行動」が目立ち，子どもの「攻撃行動」の高いことが特徴的であった。そのため，子どもの情動調整が上手くいかない「継続型」は，母親の子どもへの省察の低さが，子どもと向き合ったときの的確な対応を困難にさせ，感情のコミュニケーションの誤りや侵入的行動という非メンタライジング的行動を通して攻撃的行動を促進したと考えられる。

「沈静型」の子どもの母親は「子育て内省」や「子どもモニタリング」が高く，「洗練された説得」を積極的に用いた。子どもは「言語随伴的焦点化」を多く表しながら不快情動を沈静させた。すなわち，母子間の言語によるやり取りによって，子どもが表出した不快情動を母親が受容し，注意を切り替えることによって，子どもが気持ちを切り替えて次の行動に移りやすくなるという相互作用が考えられる。

「非表出型」の子どもの母親は，「微笑み」，「母親始発の切り替え」，「受容」が子どもの気晴らし行動につながり，不快情動が表出されない心理状態をもたらしたと考えられる。子どもの自発的な気晴らしや他の活動に対して，母親が同調する傾向が示され，金丸・無藤（2004）と同じ知見が得られたといえる。

さらに「後発型」は，母親の省察尺度や片づけ場面での行動で共通の特徴はみられなかったが，子どもの ECBQ 尺度の特徴で「不満の感じやすさ F」と「悲しみやすさ SA」が高い値を示し，一方で「注意切り替えやすさ AS」や「興奮からの落ち着きやすさ SO」，「従順さ IC」が低いことが，観察場面の中での対象に焦点化する行動や，攻撃行動として表れたと考えられる。以上より，仮説 2 と仮説 3 はほぼ支持された。

総合考察

本研究では，幼児の情動調整は愛着関係を中心とした生後の母親との関係の中で形成されていくと考え，母親の育児に関する内省機能および情動調整行動と幼児の情動調整との関連を検討することを目的とした。

研究 1 では，幼児の情動調整と母親の内省機能の特徴を，ECBQ 尺度と母親の省察尺度を使用し，2 歳から 3 歳の子どもをもつ母親を対象に質問紙調査を行った。その結果，他の要因の関連が考えられるが母親の育児に関する内省機能は子どもの注意の切り替えやすさと興奮からの落ち着きやすさに影響を与え，子育て内省が悲しみやすさを促進し，興奮からの落ち着きやすさを抑制する影響を示した。

研究 2 では，研究 1 の結果と実際の母子の情動調整行動の特徴との関係を検討することを目的として，葛藤状況であるおもちゃの片づけ場面を設定して母子の相互作

用の観察を行った。その結果，子どもは「継続型」「沈静型」「非表出型」「後発型」という4つの情動調整タイプに分類され，各情動調整タイプの行動特徴とECBQ尺度及び母親の内省機能と情動調整との関連が確認された。2歳児は，表出された不快情動の調整には，母親の働きかけを必要とすると報告されている（金丸・無藤,2004）。沈静型の母親の情動調整の背景には，親自身の内省機能が反映されていることが示唆された。また，非表出型の子どもは，母親の情動調整行動によって不快情動の表出が抑制された。この結果も，葛藤状況下で大人の働きかけによって気晴らしや行動の切り替えが可能になるという2歳児の特徴を示していると考えられる（Grolnick, Bridges & Connel,1996）。

本研究の意義は，母親の内省機能と子どもの情動調整の関係を検討すると共に，実際の不快情動喚起場面での観察から，母親の内省機能が子どもと関わる場面でどのような行動として表れ，それに対して子どもがどのような行動を示すのかを検討できたことである。さらに，母親が省察的態度を備えていても，その省察が的確でなければ子どもの不快情動を増長させ，母親の侵入的な行動が子どもの攻撃行動を増加させることを示したことである。

今後の課題として，第一に母子の行動観察場面の統制が必要であると考えられる。本研究では，観察場面が自宅であった場合もあり，設定場面が参加者によって違っていたことが結果に影響を与えた可能性がある。第二に，おもちゃ片づけ場面は子どもの欲求不満事態を想定したものだったが，子どもによっては不快な場面ではなかった可能性がある。どの子どもに対しても不快情動が喚起される場面設定が必要であろう。第三に，今回の調査では子どもの出生順位を尋ねていなかった。きょうだいの有無や対象児が第何子にあたるのかによっても，母親の行動や省察的態度が異なるかもしれない。今後は上記の点を課題とし，定型発達児の情動調整とその母親の内省機能をより深く理解するよう努め，発達障害児の情動発達と情動調整の困難さへの理解に繋げていきたい。

謝辞：

本論文は第一著者が平成26年度東海学院大学大学院修士論文として提出したものを加筆，修正したものです。調査と観察にご協力いただきましたお子さんとお母様に心より感謝いたします。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation.* Hilsdale,NJ: Law-rence Erblaum.

Bowlby,J. (1969/1982). *Attachment and Loss: vol.1 Attachment.* New York: Basic Books.

Easterbrooks, A. & Emde, R. N. (1983). Hedonic Tone Scale. Unpublished manuscript, *University of Colorado Health Sciences Center, Denver.*

Eisenberg, N., Hofer, C., & Vaughan, J. (2007). Effort-ful control and its socioemotional consequences. In Gross,J.J.（Ed.）, *Handbook of Emotion Regulation.* New York: Guilford Press. (pp. 287–306)

Fonagy,P. (2001). *Attachment Theory and Psycho-analysis.* New York: Other Press（フォナギー, P. 遠藤利彦・北山修（監訳）（2008）. 誠信書房）

Grolnick,W.S., Bridges,L.J. & Connel,J.P. (1996) Emotion regulation in two-year-olds: Strategies and emotional expression in four contexts. *Child Devel-opment,* 67 928-941.

久崎孝浩（2011）. 歩行開始期の情動制御の個人差と気質および親のパーソナリティ特性の関連性. 応用障害心理学研究, 10,69-86.

金丸智美・無籐隆（2004）. 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差. 発達心理学研究, 15,183-194.

金丸智美・無籐隆（2006）. 情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達的変化. 発達心理学研究, 17,219-229.

Kopp, C. B. (1989). Regulation of distress and Nega-tive emotions: A developmental view. *Developmen-tal Psychology,* 25, 343-354.

久保ゆかり（2010）. 幼児期における情動調整の発達. 心理学評論, 53,6-19.

中川敦子・木村由佳・鋤柄増根・水野里恵（2011）. 乳幼児の行動チェックリスト（ECBQ）短縮版の作成. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 16,1-15.

森田祥子（2004）. 乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望－保育の場を視野に入れた情動調整の発達の理解を目指して－. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 44, 181-189.

岡本潤（2010）．18ヶ月児と相互交流場面における母親の内省機能の検討．九州大学心理学研究, 11,195-201.

朴信永・杉村伸一郎（2006）．子育てにおける親の省察モデルの検討．広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 55,373-381.

朴信永・杉村伸一郎（2009）．幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討．発達心理学研究, 20,99-111.

Pederson,D.R.,Gleason,K.E.,Moran,S. (1998). Maternal attachment representations, maternal sensitivity, and the infant-mother attachment relationship. *Developmental Psychology,* 34, 925-933.

Putnam,S.P.,& Rothbart,M.K.(2006). Development of Short and Very Short Form of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 87, 103-113.

The Relationship between infants' emotional regulation and mothers' reflective functions

Aimi Yamaoka and Kunio Miyamoto

Abstract

The purpose of this study is to examine the relationship between the reflective functions of mothers and the emotional regulation of infants, assuming that infants' regulation of emotions will develop through mother-infant relations. In Study 1, we conducted a survey to investigate the characteristics of infants' regulation and mothers' reflections asking 150 mothers with 2-3 years old infants to answer the questionnaire using a Short Form of the Early Childhood Behavioral Questionnaire (ECBQ-SF) and the Parental Reflection Scale. The results showed that mothers' reflections on their childcare influenced the Attentional Shifting and the Soothability of infants, and they tend to escalate the Sadness and inhibit the Soothability. In Study 2, to examine the behavioral characteristics of mothers and infants based on the results from Study 1, we observed 10 mother-infant pairs in an experimental conflicting situation where infants put away their toys. The results showed that infants are classified into 4 types of emotional regulation: "continuance", "soothing", "non-expression", and "late expression". Behavioral characteristics of each type were found to be correlated with the ECBQ-SF, reflective functions of mothers, and infants' emotional regulation.

Keywords: emotional regulation of infants, reflective functions of mothers, mother-infant relations